

天津外国语大学学术丛书

日本古典诗歌的文体 与中国文学

张晓希 编著

丛书主编：修刚

南开

日本古典诗歌的文体与中国文学

张晓希 编著

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

日本古典诗歌的文体与中国文学 / 张晓希编著. —天津:
南开大学出版社, 2010. 12

ISBN 978-7-310-03461-1

I. ①日… II. ①张… III. ①日本—古典诗歌—关系
—文学—研究—中国 IV. ①I313.072②I207.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 224381 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:肖占鹏

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

天津泰宇印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010 年 12 月第 1 版 2010 年 12 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 8 印张 4 插页 170 千字

定价:20.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

前言

日本古典诗歌从文体论而言，是指口传文学时代的歌谣、中国文字传入后创作的汉诗、日本自身文字体系形成后确立的定型诗和歌、连歌、俳句、川柳、狂歌等古典诗歌形式。

三世纪前后，汉字自中国传入日本后，口传文学时代的歌谣一部分文字化，出现了记纪歌谣。自此，歌谣从口传文学向记载文学方向发展，其表现形式也逐渐固定化。古民谣中的神乐歌、东游歌、催马乐、风俗歌、今样等也作为朝廷祭神、仪式的唱词得以完善，并在平安时代至江户时代的贵族社会中盛行。从歌谣的形式、文体到素材都可以看到中国文学的影响。

自奈良时代起，中国的文学典籍与思想、文化、宗教等一起由遣隋使、遣唐使、遣明使带回日本。在对其不断学习的过程中，日本人开始创作汉诗。日本最早的汉诗集《怀风藻》从形式到内容两方面都受到中国文学很大的影响。其诗体受到六朝与初唐诗的影响，五言诗居多，多数诗的平仄完全自由。平安时代初期是唐风文化的鼎盛期，汉诗文被提到经国大业，不

朽盛事的高度，作为贵族文学在宫廷社会中占据统治地位，勅撰汉诗集也得以编撰。由于中国文学的影响，汉诗诗句日趋丰富，新的诗风与诗体得以发展，诗的形式也开始增加，从奈良时代的五言诗发展到七言诗。与此同时，长篇乐府诗与杂言诗的数量也急剧增多。中世的汉诗呈现出新的倾向，由于五山禅林诗僧强烈的宗教热情，使得宋、元、明的思想文化及中国禅林文学浸润下的新的诗风传入日本，汉诗创作非常盛行。禅僧们以其广博的学识，创立了涉及多种诗体、纵横自在的诗风。汉诗文在质与量上都凌驾于前一时代。江户时代，中国儒教以及丰富的文化遗产通过长崎的“唐通事”传入日本。此时的汉诗界诗人辈出，呈现出百花齐放的盛况。日本诗歌从形成期模仿中国，具有浓厚的中国色彩，到慢慢加入日本独特要素，最后形成新的诗歌形式。

另一方面，由记纪歌谣发展而成的《万叶集》是日本最早的和歌集，是借用汉字的音训标记的。但由于其题词及左注多由汉文书写，因而成为了解当时汉文的珍贵资料，《万叶集》中的许多和歌也深受中国思想、文学的影响。和歌的形式为“五七调”或“七五调”，由五音节与七音节组合而成、并有长歌、短歌、旋头歌、片歌、佛足石歌等各种类型的和歌文体。然而，除短歌以外，其他和歌文体并未在后世得到太多的发展。

九世纪后叶起，假名文学的发明和普及，使日本固有的定型诗——和歌再度兴起，《古今和歌集》、《新古今和歌集》以及大量的勅撰和歌集面世，迎来了和歌的兴盛时代。而汉文学的影响也已深深地浸入了和歌文学内部。

日本中世，作为和歌的余兴、余技发展起来的连歌分为以机智、滑稽为主的“无心连歌”与继承优雅和歌诗风的“有心连歌”。继承“无心连歌”的俳谐连歌后来发展为近世的俳谐。近世诗歌的特点是逐渐大众化。俳谐连歌的初句得以独立，形成了世界上最短的定型诗，并出现了具有浅显通俗的机智与滑稽风格的川柳及和歌形式的狂歌。

日本古典诗歌是在积极地吸收中国先进文化的过程中逐渐形成自己独特诗歌样式的。在其发展过程中，中日两国文学不断融合，各个时代都出现了形式不同的诗歌文体，古代日本人就是用这些语言高度凝练，意义含蓄的文学形式来描写生活、抒发自己情感的。

前書き

日本の古典詩歌は文体論から言えば、口承文学時代の歌謡、中国の文字が伝入してから創作された漢詩、日本自身の文字体系が形成された後、固定化され、作られた定型詩の和歌、連歌、俳句、川柳、狂歌などを指すものである。

三世紀前後、中国から漢字が伝わって、口承文学時代の歌謡は記記歌謡として一部分文字化され、流動的な表現のあり方は固定され、定型化への道をたどった。古い民謡の神楽歌・東遊歌・催馬楽・風俗歌、今様が朝廷の神事や儀式のための謡い物として、整備され、平安時代から江戸時代にかけて貴族社会で行われた。歌謡の形成、文体、素材から中国文学からの影響を見逃せない。

奈良時代から中国の経学及び漢詩文は遣隋使と遣唐使によって船舶され、それらを学ぶとともに日本人は漢詩文を作るようになり、最初の漢詩集『懷風藻』は形式と内容両面には大きな影響を与えられ、また、詩体は六朝詩と初唐詩の影響がうかがえ、五言詩が圧倒的に多く、平仄の整っていないものが多い。平安時代初期は唐風文化の全盛期で、漢詩文は「経

国の大業、不朽の盛事」とされ、公的な文学として宮廷社会に正統な地位を占めるようになり、勅撰集も編集された。遣唐使から舶載された中国詩集の影響で詩句も豊富になり、新傾向の詩風や詩体を受容された。詩の形式も拡大し、奈良時代の五言詩から七言詩へと移行するとともに、長編の楽府や雑言体の詩も急激に増加した。中世の漢詩は、五山禪林の詩僧たちの宗教情熱によって宋・元・明の思想・文化と中国禪林文学の浸潤で新たな漢詩風が移植されて、漢詩の制作が流行り、禪僧たちは広範的な学殖を背景に多類の文体にわたる縦横自在の作風を展開した。漢詩文は質量ともに前時代を凌いだ。江戸時代の漢詩は中国の儒教の伝入とともに長崎を通じて唐通事らの手を経て豊かな文化遺産をもたらされ、詩人が輩出し、こうした漢詩文の百花斉放の時代を迎え、中国模倣の色の濃い漢文学の形成から日本漢文の独自の要素を混じった詩歌形式に達成した。

一方、記紀歌謡から発展してきた『万葉集』は日本最初の和歌集で、漢字の音と訓を借用してできたのであるが、題詞及び左註などは漢文で書かれ、当時の漢文理解には大切な資料ともなる。『万葉集』は中国の思想、文学からの影響が大きく、歌の形式では「五七調」または「七五調」というように、五音節と七音節の組み合わせにより、更に長歌、短歌、旋頭歌、片歌、仏足石歌のように、基本的に各種類の歌の形式による分類が見出されるようになったが、短歌以外、他の歌体は後の時代にはあまり大きな発展ぶりを見せなかった。

九世紀の後半になると、仮名文字が発明された。それが普及する中で日本固有の定型詩である和歌が再び台頭し、独自の展開を遂げ、『古今和歌集』、『新古今和歌集』をはじめ多くの勅撰集が勅撰され、以後の和歌の隆盛時代をもたらすようになり、漢文学的な影響は和歌文学の内部に浸透する結果になった。

日本中世には和歌の余技・余興として発展してきた連歌は滑稽を主とする無心連歌と和歌の情趣を詠む有心連歌とに別れたが、無心連歌の流れをくむ俳諧連歌がやがて、近世の俳諧へとつながっていった。近世の詩歌は次第に大衆化され、俳諧連歌の発句が独立された世界で一番短い定型詩の俳諧と卑近通俗な機知や滑稽を詠み込む川柳と和歌形式の狂歌が現れた。

日本古典詩歌は中国の先進的な文化を主体的に受容しながら、独自の詩歌の様式を形成した。それが発展されているうち多様かつ独特な形態をそれぞれの時代に開花させ、日本的な感性・思惟の表現様式が創出されたのである。

目 录

第一章 歌謡	1
一、記紀歌謡	2
二、神楽歌	8
三、催馬楽	13
四、今様	18
五、小歌	24
第二章 漢詩	29
一、漢詩の発生	29
二、漢詩の文体	31
三、漢詩の史的展開	32
第三章 和歌	77
一、和歌の発生	77
二、和歌の文体	78
三、和歌（短歌）の修辞	83

四、和歌の史的展開	98
第四章 連歌	146
一、連歌の発生	146
二、連歌の文体	147
三、連歌の史的展開	170
第五章 俳諧	180
一、俳諧の発生	180
二、俳諧の文体	181
三、俳諧の修辞	183
四、俳諧の史的な展開	195
第六章 川柳	211
一、川柳の発生	211
二、川柳の文体	212
三、川柳の史的な展開	213
第七章 狂歌	221
一、狂歌の発生	221
二、狂歌の文体	222
三、狂歌の史的な展開	223
終わりに	230
参考文献	237
後書き	239
后 记	241

第一章 歌謡

第一章
歌謡

歌謡というものは、民衆の歌として、日常の生活を彩り、慰めるものとして、生活の中から自然と呼び出されるものである。日本古代歌謡の起源は、共同体の祭りの場、人々によって唱された歌にあった。これらの歌は、神への祈りや感謝を表すものとして、舞踊や簡素な楽器を伴う形で繰り返し歌われ、また集団的な労働や作業の能率を高める役割も果たしていた。

歌は共同体が成長し、様々な集団行事が営まれる中で、しだいに形式が整えられ、洗練された内容を獲得していく。それらは歌垣などの場で民謡として広く歌われる一方、統一国家が形成される過程で、宮廷儀礼の中に取り込まれ、宮廷歌謡としても伝承されていった。

一、記紀歌謡

1. 記紀歌謡の発生

『古事記』・『日本書紀』に収められている歌謡を総称して「記紀歌謡」と呼ぶ。『古事記』に約百十首、『日本書紀』に約百三十首が見え、両者に重出するものを除けば約百九十首になる。これらの歌謡は、独立した民謡そのままの形ではなく、神話や伝説と結び合わされ、あるいは歌謡を中心とする物語化がなされている場合が大部分である。その内容は祭祀、戦闘、労働、恋愛、酒宴、哀傷など多方面にわたり、古代の人々のさまざまな生活感情を知ることができる。

2. 記紀歌謡の文体

記紀歌謡の歌体の種類の名称は特定されていないが、後の歌体の呼び方に従えば、長歌・短歌・旋頭歌・仏足石歌などで、短歌の体をもっているものが最も多い。ただし、一句の音数は短い句が五音、長い句が七音というのが基本とみられるが、音数は、初め六音・八音など一定しないものが多いが、次第に五音・七音に固定されていく。

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる
たひと その旅人あはれ 親なしに 汝生りけめや
 さす竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる

その旅人あはれ

片岡山で、食べ物に飢えて横になっておいでになる。その旅人はお気の毒である。親がないままに生まれ育ってきたのか、仕える主人はいないのか、そんなことはなかろうになあ。食べ物に飢えて横になっておいでになる、その旅人はお気の毒である。

推古天皇二十一年（613 年）十二月一日、聖徳太子は片岡（現奈良県北葛城郡香芝町今泉付近）に出かけた。その時、飢えた旅人が道のほこりに倒れていた。太子は飲食物を与え、自分の衣服を着せてやって、この歌を詠んで帰った。

使者をやってみると、旅人は死んでいた。それで、墓に埋めてやった。ところが、数日後には、墓に死体はなく、衣服がたたんであったという。聖徳太子の徳を称える形になっているが、死霊を慰撫する民俗信仰に立脚している。

この歌はいわゆる行路死人歌の一つである。同じ句が繰り返されている点、形式的には古格を持っていて、詠唱されたものと見られる。

聖徳太子は用明天皇の皇子で、推古天皇元年（593 年）皇太子となり、摂政として、冠位十二階・十七条憲法の制定、国史の編纂、学術工芸の奨励、中国文化の導入などに努め、また仏教に深く帰依して『三経義疏』^{さんぎょうぎしよ}の著述、法隆寺・四天王寺の建立などを行った。

やくも いづもやへがき つま
八雲立つ 出雲八重垣を 妻ごみに
八重垣作る その八重垣を

す さ の をのみこと
『記紀・須佐之男 命』

(八雲立つ=枕詞) 出雲の国に、八重の垣に囲まれた宮殿、
妻がこもり住む宮殿を建てて。ああ、その宮殿よ。

この歌は、須佐之男 命 ^{す さ の をのみこと} が新妻櫛名田比売 ^{くしなだひめ} と住むために、
須賀 ^{すが} の宮を造られたときに、そこから盛んに雲が立ちのぼる
(雲が立ちのぼるのは瑞兆 ^{ずいちよう} とされた) のを見て詠まれた歌と
されている。元来は『古事記』の歌謡にしばしば見られるよ
うに、個人の立場で呼んだものではなく、豪族の若殿の結婚
や婚舎の新築を祝福する人々の歌で、酒宴などで歌われたも
のであろう。素朴な民謡がこのような形に整えられた。

第十二代景行天皇には、倭建命 ^{やまとたけるのみこと} という皇子がいた。乱
暴者で手がつけられない。天皇は恐れ、熊曾征伐に派遣した
が、倭建命は女装して巧みに宴席の熊曾建に接近し、これを
殺した。帰途には出雲建 ^{いづもたける} をも智謀を以って殺害し、揚々と凱
旋した。ところが、天皇は、まだこの征旅の疲れもとれぬう
ちに、今度は東方の荒ぶる神々たちを平定せよと命じる。

今度の旅は苦難が多い。倭建命は相模国(現神奈川県)の
国造に騙され、火攻めにあつた。その時に向かい火をつけて
危難を脱出し、国造等を打ち滅ぼした。また、走水海 ^{はしりみずのうみ} を渡
ろうとしたとき、渡りの神に荒波を起こされて船を進めるこ
とができなかった。弟橘比売命 ^{おとたちばなひめのみこと} が海に身を入れるや、浪は

静まり、船を進めることができた。次はそのときの歌である。

さねさし ^{さがむ} 相模の小野に 燃ゆる火の
^{ほなか} 火中に立ちて 問ひし君はも

『記紀・弟橘比売命』

相模の野で、盛んに燃える火の、その炎の中に雄々しく
 立って、私の安否を尋ねてくださった、あなた様よ。

別離し、それもみずから進んで選んだ死別にあたって、火
 難の時の心づかいを回想して夫を深く思慕している。物語は
 簡略に、ごく淡々としているが、この嘆息は悲痛で、重い。

^{をはり} 尾張に ^を ただに向かへる ^{をつ} 尾津の崎なる
^{あせ} 一つ松 吾兄を 一つ松 人にありせば
^{たち} 太刀佩けましを ^{きぬき} 衣着せましを 一つ松
 吾兄を

『記紀・倭建命』

なつかしい尾張の国にまっすぐ立っている尾津の崎にある
 一本の松よ、あなたよ、一本の松が、かりに人であったなら、
 太刀をおびさせようものを、着物を着せようものを。一本松
 よ、あなたよ。

この歌は、美濃^{みの}の国から尾征津の崎に来たとき、以前東征
 に赴く際にここでお食事をしたが、そのときに忘れたご帯刀

がなくならないで、そのままにあった、そこで詠んだ歌とされている。忘れた大刀をなくならないように守ってくれた一本松に対して感謝し、人間と同じように賞を与えたいという気持ちを詠んだものである。

この歌からは、あこがれの尾張に枝を差し伸べて浜辺に立つ松に愛着をもち、擬人化することのできた古代人の心も読み取れる。音数も五・七音が多い、定型というほどでなく、比較的自由に周囲の自然との融合した素朴な感情が感じ取られる。

苦しい征旅の帰途、伊吹山いぶきやまの神を倒そうとしたときに、ちよつとの油断から相手を侮り、その妖気におかされて、倭建命は鈴鹿山のほとりの能煩野のぼのにおいて、ついに最後のときを迎えねばならない。帰りつけない懐かしい大和を偲んで、

やまと
倭は 国のまほろば たたなづく
青垣 山隠れる 大和しうるはし
命またの全けむ人は たたみこも 平群へぐりの山の
熊くまかしが葉を うずにさせ 其の子
愛はしけやし 吾家わがへの方よ 雲くみ立ち来も

『記紀・倭建命』

大和は大変すぐれた土地だ。幾重にも重なり合っている青々とした垣のような山々。その山々に取り囲まれている大和は本当になつかしいことだよ。命が無事で故郷に帰れるような人々はあの大和の平群の山の立派な榎の葉をかんざしとしてさせよ。お前たちよ。ああ、なつかしいことだなあ。わ